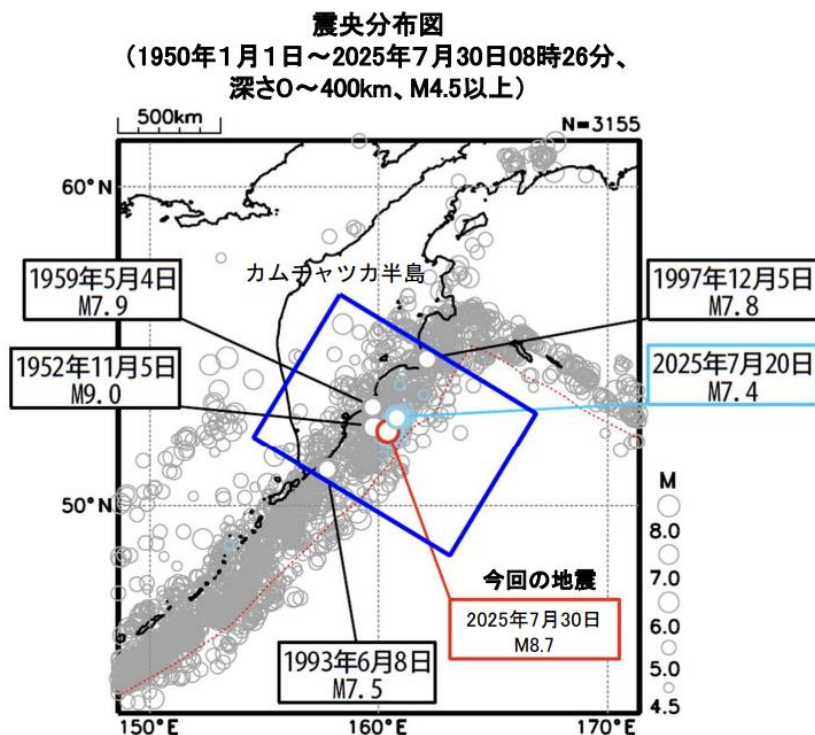


カムチャッカ巨大地震の余震活動

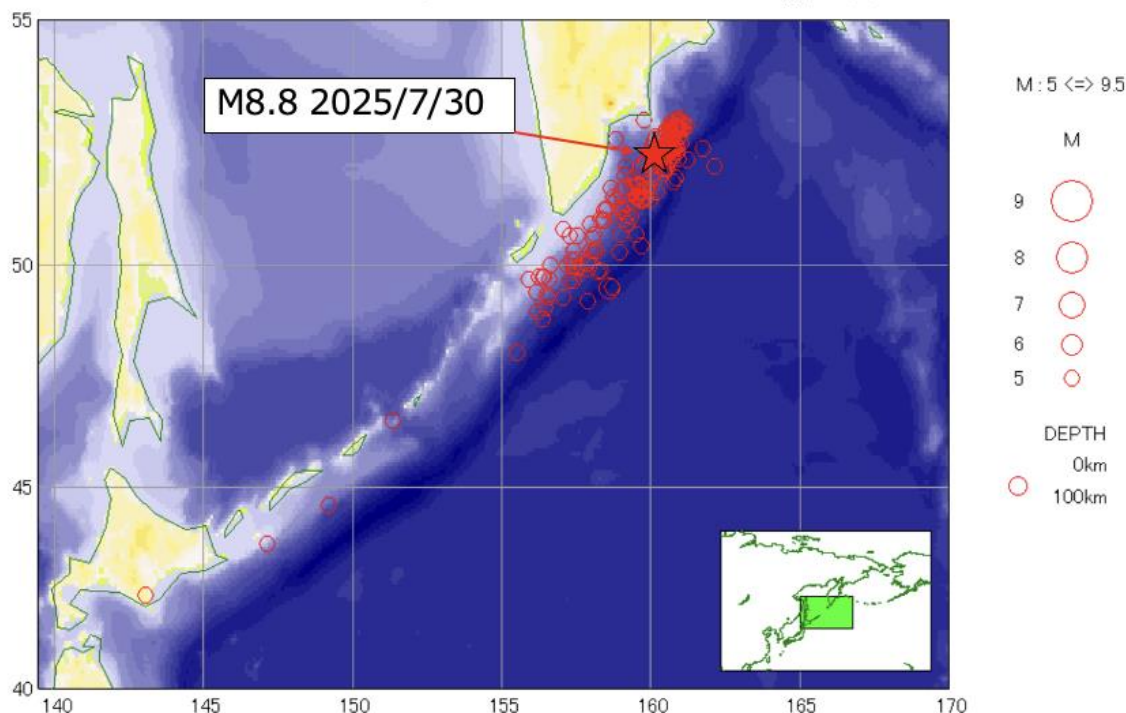
7月30日に発生したカムチャッカ半島沖での巨大地震は、地震学界でも衝撃をもって受け止められています。これまでの考えでは、「一度マグニチュード9クラスの地震が発生すれば、同じ場所では数百年は巨大地震は発生しない」というものでした。これは一度歪みが解放されてしまえば、再び同程度の歪みが蓄積されるのに400-500年程度はかかるという事を根拠としていました。

ところが、カムチャッカ沖では、1952年にほぼ同じ場所を震源とする M9の巨大地震が発生しており、今度の地震は73年という極めて短い間隔で発生しています。これは従来の常識では考えられない事でした。上の図は気象庁資料による過去の地震発生の履歴です。1952年の地震と2025年の地震の震央がほぼ同一である事がこの図からもわかるのではないのでしょうか。

また地震の規模がマグニチュード8.8と極めて大きかったため、数多くの余震が発生しています。



7月30日と31日に発生したカムチャッカ巨大地震の余震 マグニチュード5以上のものだけで189個が発生した

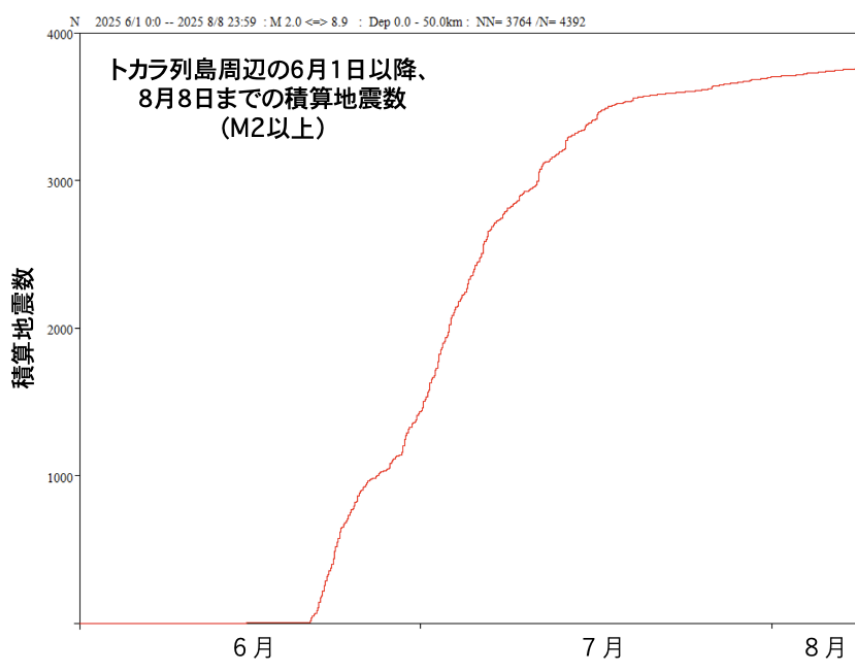
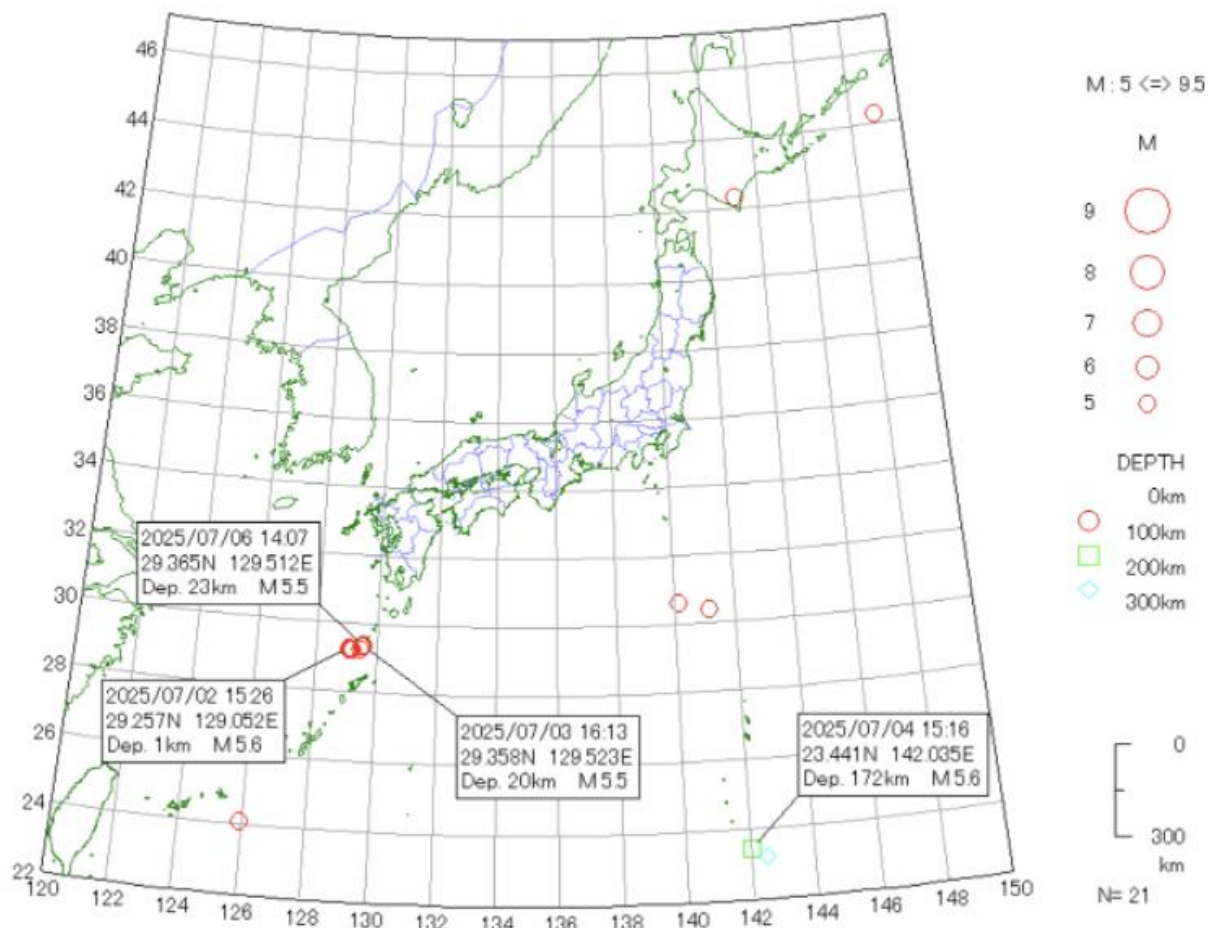




7月の地震活動概観

7月は、6月21日に開始した鹿児島県・トカラ列島近傍での群発地震活動が続いていますが、ようやく活動がおさまってきました。それ以外の地震活動は低調な一ヶ月であったと思います。

7月1日から31日に発生したマグニチュード5以上の地震



トカラ列島周辺で発生したマグニチュード2以上の地震数。ようやく小康状態となった。



東北地方海域の地下天気図®

今週は8月8日時点の東北地方海域の M タイプ地下天気図をお示しします。

青森県沖・北海道南東沖の日本海溝の地震活動静穏化(図で青い部分)が、7月14日のニュースレターでお示した領域より小さくなっている事がわかりました。また茨城県・福島県沖の地震活動静穏化領域も小さくなっているようです。これはカムチャッカ半島での巨大地震発生により、千島海溝および日本海溝沿いの地震活動が影響を受けているのかもしれません。

最近数ヶ月コメントしています宮城沖、福島沖の静穏化はほぼ終了しており、日本海溝東側(アウターライズ)地域での地震発生準備がほぼ整ったのではないかと考えています。

